



Title	フィンランドの樹木とともに生きる世界：死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語 [全文の要約]
Author(s)	田中, 佑実
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15065号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85460
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Yumi_Tanaka_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 田 中 佑 実

学位論文題名

フィンランドの樹木とともに生きる世界
—死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語—

フィンランドのサヴォ地方を中心とする地域では、かつて死者のカルシッコと呼ばれる樹木が知られていた。死者のカルシッコは家から墓場へと繋がる道の途中に立つ木々の中から選ばれ、枝が切り落とされたり、死者のイニシャルや生没年が刻まれることで作られていた。それらの樹木は家へ戻ろうとする死者を墓場に返すとされ、死者と密接に結びつくその性質から、人々にとっては恐怖の対象であったが、同時に死者を思い出すもの、または人々の生活や運命に影響を及ぼすものとして畏敬の念を抱かせる存在でもあった。しかし19世紀後半の産業の発展や近代化が、死者のカルシッコに対する人々の認識を塗り替えていった。「自然」は私たちの生活から遠ざけられて、科学や経済の発展を支え、人間がコントロールできるものとしての認識が強められることとなった。樹木の物質的側面が強調されていく中で、人々と特別な関係を結んでいた樹木は伐り倒され、死者のカルシッコも姿を消していくこととなった。

本博士論文の目的は死者のカルシッコの風習における樹木がどのような存在なのか、そしてそれが死者や生者といかに関わりあっているのかを明らかにすることである。今日カルシッコの風習を続けている人々の生活から見えてくるのは、産業化の中で急速に切り離されていったとされる死者と「自然」、そして生者が互いに関わり合う姿である。フィンランドのフォークロアにおいて、死者である祖先との繋がりを絶つことは、「自然」との繋がりを絶つことに繋がっている。フィンランド民俗学者のマルッティ・ハーヴィオ (Martti Haavio) はカレリア地方やフィンランドの呪詞において、「自然 (ルオント/luonto)」は「超自然的」存在であるハルティア (haltia) と誕生を意味する言葉シュントウ (synty) と同義語であり、一族の祖先の霊を意味していたことを述べている (Haavio 1967:290)。かつてフィンランドでは豊作や恵み、はたまた不作といった「自然現象」は祖先によって決まるとされており、死者である祖先は、この世に生きている者の生活を決めることができると考えられていた。このような考えは、カレリア地方に残る泣き歌からも垣間見えるものであり、死者である祖先と「自然」の恵み、それに伴う生者の生活は関連していたことがわかる。

本博士論文は、キリスト教化及び産業化の波を受けながらも、現代まで続いてきた死者のカルシッコの風習に着目することで、死者を含めた「自然」と「人間」の繋がりを

もう一度描きだし、互いに融解し合う樹木、死者、生者、三者の繋がりを指摘することに意義がある。樹木はこれまで、その象徴性によって民俗学を中心に研究の対象となってきた。一方「自然と文化」「自然と人間」を巡る存在論的転回を中心とする近年の人類学的議論では、樹木も人間と同じく主体性を持つものとして記述されてきている。このことは、それまでの人類学的研究が単一の「自然」に対して様々な「文化」があり、「文化」をもつ「人間」が主体となって「自然」に働きかけるという構図のもとで行われていた反省として現れている。存在論的転回は人類学が自明のものとしてきた「自然と文化」の二元論を見直し、「自然」もまた「人間」に働きかける主体として考えていく方向性を示している。その中でも、マルチスピーシーズ人類学は、人間中心主義からの脱却を目指し、種間の「ともに生きる」在り方を数多く描き出してきている。

これまで植物は神話や伝承における象徴的存在として、または稲を中心とするような農村研究において研究者の関心を集めてきたが、存在論的転回以降の「自然と文化」を巡る人類学的研究において「人間」と同格の存在として研究される際には、生態的及び経済的視点から議論される場面が多く、アプローチの仕方は未だ限定されていると言える（コーン 2016；チン 2019）樹木と人間との関係は、より物質的要素の強いモノという側面から人間の経済社会を動かすアクターとして記述されてきた。

これまでフィンランドで展開されてきた死者のカルシッコに関する研究でも、カルシッコの樹木はモノとして捉えられ、それ自身の主体性については触れられてこなかった。死者のカルシッコに関する研究は、その形式や起源、機能、分布、ヨーロッパとバルト地域との関係を中心に考察がなされてきたが（Aspelin 1882；Hornborg 1886；Krohn 1894；Waronen 1898；Kaarle Krohn 1898；Hornborg 1924；Kemppinen 1967；Vahtola 1980；Pentikäinen 1990；Sarmela 2009）、風習は人々の生活の文脈から切り出して検討されることが多く、死者と生者の繋がりは頻繁に取り上げられても、風習の担い手である人々の生活の中でカルシッコの木がどのような存在として捉えられているかということについて検討されることは少なかった。その理由は、これまでカルシッコの風習が人々の生活や社会の流れの中で捉えられてこず、樹木自体は死者と生者を分けると同時に結ぶ、ある種のメディアとして、また主体を奪われたモノとして考えられてきたためだと推測する。

そのため、本博士論文では樹木をモノとしての存在に限定せず、生きて、他者との繋がりの中で影響力を持つ存在として示すことで、死者を含めた他者との関係の中でカルシッコの樹木を捉えなおすことを目指す。カルシッコの樹木の捉え直しによって、それと繋がる死者と生者の繋がりを明らかにしていく。

第1章では本研究の位置づけとして、人類学における「自然と文化」を巡る先行研究を提示し、西洋近代の基盤にあるとされる「自然」と「文化」の二元論が問い直されていく学術的動きを記述する。本博士論文は、カルシッコの風習から樹木と死者を含む人間のともに生きる諸相を明らかにすることを目的としているが、その根底には「自然」

と「人間」がともに生きるあり方を探るという、より大きな目的も存在している。そのため、人類学の「自然と文化」「自然と人間」を巡る研究に本博士論文研究を位置づけている。第1節では、「存在論的転回」と呼ばれる人類学における認識論から存在論への転換と「自然」への主体性の動きについて記し、その学術的動きの中で、他種とともに生きる在り様を民族誌的に描き出しているマルチスピーシーズ人類学を紹介する。第2節では植物学における植物の知や身体性に関する議論を示すことで、植物学と人類学が軌を一にする人間中心主義の問い直しについて指摘する。また、第3節では人類学における死と死者に関する研究について特に死者儀礼の視点から記述する。死者のカルシッコの語源とされる、枝を切り落とす意の“karsia”というフィンランド語の動詞に現れているように、樹木の枝を実際に切り落とすことによって、人々は死者をこの世のコミュニティから切り離し、死者と生者、全員の人生に節目をつけていた可能性をここで示す。フィンランドにおいて「自然」を語る際、また本博士論文のカルシッコを語る際に重要となるのは、死と死者である。特に死者は「自然と文化」「自然と人間」の両者と繋がる注目すべき存在である。ここでは、カルシッコを扱うことで、儀礼研究において「人間」に限定されていた共同体が死者と「自然」に拡張していく可能性を示す。

第2章では、フィンランドにおける宗教的世界観について記述することで、死者のカルシッコを理解するための地盤を示す。第1節では、フィンランドにおける宗教的、文化的推移をキリスト教以前からキリスト教以後にかけて概説する。第2節ではキリスト教以前からフィンランドの人々の間で知られていた「超自然的」存在、ハルティア(haltia)を紹介する。ハルティアは「自然」と「人間」を結ぶ役割を担っていた。この「超自然的」存在は、本博士論文研究の基盤にある「自然」と「文化」の問い直しに関わる存在であり、死者との繋がりも深いため、フィンランドにおける「自然」と「人間」を考える際に重要である。第3節で述べる捧げものの木は、フィンランドにおいて死者を含めた「自然と人間」が精神的にどのような繋がりの中にあっただかを知る手がかりとなる。本博士論文では主にフィンランド文学協会のフォークロアアーカイブの資料を参照し、樹木と生者、死者、またはハルティアのような「超自然的」な存在が両者の運命に影響を与え合っていたことを示す。このことを通して、死者との結びつきの強いカルシッコの樹木と人々の関係を考える足掛かりとしたい。

第3章では、カルシッコの風習に関するこれまでの先行研究をもとに、カルシッコの種類や形、風習の起源や担い手、風習の基盤にある死後の世界と死者への考えを示し、アーカイブ資料を提示しながら、時代とともに変化してきた死者とカルシッコの樹木、生者の繋がりについて述べる。カルシッコはこれまでフィンランドで著名な民俗学者によって研究されてきた。しかし実際のところ、そのほとんどは前の研究者が記述した情報を引用する形で論じられており、情報の不確かさについては深く見直されてきていなかった。そのような中で、1992年に当時博士課程の学生であったヤンネ・ヴィルクナ(Janne Vilkuna)が博士論文として記した“*Suomalaiset Vainajien Karsikot ja*

Ristipuut” は、19 世紀から続くカルシッコ研究を体系的にまとめたものとして、今日死者のカルシッコ研究の金字塔的存在となっている。本博士論文は Vilkuna (1992) の議論に依拠しているところが大きい。死者のカルシッコの起源については、キリスト教化の度合いとの兼ね合いで、未だ疑問の余地が残る部分もある。第 3 章では、カルシッコに関する基本的な情報とこれまでの先行研究をまとめることで、フィールドワークでの情報と比較する際の地盤を提示する。

第 4 章では、フィンランドの近代における産業と農業の発展に加え、今日の森林産業の様子を述べ、暮らしの中の林業や樹木及び森の保護の在り方について触れる。フィンランドでは古代から人々にとって樹木は精神的な繋がりだけではなく、住居や道具を作る際の木材という物質的な繋がりにおいても重要な存在であった。樹木は今日でもフィンランドの経済を支える重要な資源である。現在フィンランドの輸出量の 20%以上が森林業によって賄われていることから、フィンランドにとっての樹木が重要な資源であることがわかる。第 1 節と第 2 節では、産業と農業の発展と森林産業について概説し、第 3 節では、より今日の人々の暮らしに根付いた林業の在り方を示すために、サヴォ地方で父親から受け継いだ広大な敷地を所有し林業を行っている女性の語りを紹介する。その語りからは林業のサイクルだけでなく、樹木や森が決して物資的側面からのみのまなざしで捉えられていないことを知ることができる。このことは樹木の物質的側面が強められていく産業化の中で、特別な樹木や森を保護しようとする動きが出たこととも重なり合う。保護の動きはこれまでのカルシッコの文脈においても重要なものであるため、第 4 節では保護について考察する。第 4 章では樹木を精神的繋がりとは異なる立場から眺め、より実質的な視点から樹木を描き出すが、そこではどちらか一方には割り切ることのできない樹木と人間の繋がりが垣間見えるのである。

第 5 章では調査の概要について記す。筆者はフィンランドの北カレリア地方ユーカに住む夫婦のもとでフィールドワークを行った。妻、イーリスの家系は 1771 年から現在と同じ土地で農業を営み、現在まで暮らしている。今日、家族は農業をやめているが、家から続く、少し離れた道の傍らには、家族が農業を営んでいた時代から人々とともにあった死者のカルシッコの樹木が佇んでいる。第 5 章では、調査地をユーカに定めるまでの経緯から、調査地ユーカの概要、調査期間、調査方法、研究倫理上の注意点について記している。

第 6 章では、家族、樹木、死者、他の人々との繋がりを中心に描いている。フィールドのカルシッコの樹木は死者を思い出させるものというだけではなく、ときに樹木自身の思考やテリトリーを認められており、特に死者との結びつきによって樹木と生きる人々に影響を与える存在であった。カルシッコの樹木について話す家族の語りからは、カルシッコが各人との繋がりの中で異なる表情を見せていることも明らかとなる。また、カルシッコの樹木と家族の繋がりから視野を拡張し、フィールドにおける他の樹木、死者、生者についても記述している。これらの記述から現れるのは、これまでのカルシッコ

この先行研究で欠けていた、人々の生活を基盤としたカルシッコの風習の姿と樹木の行為主体性、そして生活を構成する様々な存在が互いに関係しあう現場の様子である。

第7章では、「自然と人間、モノ」を巡る人類学的議論と第6章で記述したフィールドでの情報を踏まえ、死者のカルシッコの樹木を「人」または「モノ」と仮定して、風習において樹木がどのような存在として人々の前に現れているかを考察する。近年の「自然と文化」を巡る人類学的議論においては、この二元論を問い直すだけでなく、「人間」自体が問い直され、「人間」が拡張してきてもいる。このことを踏まえ、第1節ではカルシッコの樹木は「人」として捉えられるかという部分について考察する。また第2節では「モノ」としてのカルシッコの樹木を軸に、科学人類学者のブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) らが提唱したアフターネットワーク理論を引き継いだ、芸術人類学者のアルフред・ジェル (Alfred Gell) の agent/ patient の概念を用いてフィールドにおけるカルシッコ、樹木、死者、生者の関係を紐解いていく。ジェルの理論を通して、カルシッコは死者の personhood が埋め込まれていることを指摘し、カルシッコと死者の関係性から、樹木と人間が互いに分配されていることについて記述する。しかし死者のカルシッコの樹木は人間に近い存在として語られるとは言え、人ではなく、また単に行为主体性のあるモノでもなかった。フィールドにおいて死者のカルシッコの樹木は人間や森の動物たちと同じように、生まれて、家族を作り、死んでいく「エラマ/elämä」があると言われたのであった。

このことを踏まえ、最終章である第8章では、フィンランド語独自の概念である「エラマ」を現代のカルシッコの風習を理解するためのキーワードとし、風習を続ける人々の生活の中で、樹木と人間の「エラマ」がどのような関係の下で結びつき、またどのようにその繋がりが死を含みながら次の世代へ引き継がれていくのかを示す。第1節ではフィンランド語の「エラマ」という言葉の意味について提示し、この言葉がフィールドにおいて、また家族にとってどのような意味合いのもとで用いられているかを記述する。第2節では、カルシッコの樹木と人々の両者は死者を媒介としながら、尊敬とケアの関係のもとに、互いの「エラマ」を支え合っていることを指摘する。カルシッコの樹木に対する彼らの尊敬を示す様子は、彼らの言葉だけでなく、態度や行動にも表れており、また尊敬にはケアも含まれていた。カルシッコの近くでは静かに歩くこと、周りの森を乱さないこと、カルシッコを保護すること、伐り倒さないこと、修復すること。これらは全て尊敬とケアの意識から生まれたことである。家族がカルシッコの樹木に対して尊敬とケアの意を示すとき、カルシッコの樹木も家族の歴史を体現し、家族と繋がり、思い出を紡ぎ、与えることによって家族を尊敬し、ケアしている。しかし、ここで忘れてはならないのは死者の存在である。死者はカルシッコの樹木と生者を結ぶ単なる媒介者ではない。死者はフィールドの家族の生活風景の中に溶け込み、何かの折に触れて家族に死者を思い出させる。中でもカルシッコの樹木は、その印によって強く死者を思い出させるものとなっており、死者をその一部としている。また家族は、自身が死者の一部

でもあると言う。樹木と家族は死者によって結び付けられ、この三者は互いに相手の要素を自身の一部としているのである。このような死者を含めたカルシッコの樹木と生者の関係については第3節で扱った。

本博士論文研究は、フィールドにおいて導きだされた「エラマ」という概念を今日のカルシッコを理解するための手がかりとして、樹木、死者、生者の関係を描くことで、「自然と文化」「自然と人間」の分断の問い直しを目指したものである。「自然と文化/人間」を巡る人類学的議論において、樹木を生態的または物質的側面に限らず、生きて、より精神的つながりにおいても他者を取り込みながら影響を与える存在として捉えなおす機会となるのではないだろうか。加えて、本博士論文研究において「人」や「モノ」という存在物としての枠組みを超えて、そのものの「いのち」や「人生」の繋がり、「生きること」について指摘したことは、今後の生命論を含めた「自然と文化」を巡る議論の発展への小さな貢献でもある。ここで再度思い起こされるのは、Haavio(1967)が指摘した、祖先の霊を意味することもあるフィンランド語で自然を意味するルオント(luonto)である。かつて、死者の霊を担う「自然」は自然現象などによって人々の生に影響を及ぼし、人々は死者を尊敬し、ケアすることで、両者の相互関係は成り立っていた。この影響関係は現代のカルシッコという文脈からも現れていた。死者としての、そして樹木としてのカルシッコの「エラマ」と今を生きている人々の「エラマ」は尊敬とケアの関係にあり、両者は他方を支えている。それは切っても(karsia)切り離せない関係である。今日のカルシッコに見る「自然と人間」のエラマの結びつきは、「死者と生者」間にも及ぶものでもあるのだ。現代における死者のカルシッコの風習を通して樹木と死者、生者がともに生きる世界を描き出す本博士論文研究は、私たちが「生きること」、そして死者や他種を含む他者と「ともに生きる」ということの実態に迫るひとつのアプローチである。

参考文献

コーン, E.

2016『森は考える一人間的なるものを超えた人類学』 亜紀書房.

チン, A.

2019『マツタケ不確定な時代を生きる術』 赤嶺淳訳 みすず書房.

外国語文献

Aspelin, J. R.

1882 Karsikot. *SUOMEN YLIOPIILASKUNNAN ALBUMI Elias Lönnrotin kunniasksi*. pp. 308-312. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

- Gell, A.
1998 *Art and agency: an anthropological theory*. Oxford University Press.
- Haavio, M.
1967 *Suomalainen mytologia*. WSOY.
- Holmberg, U.
1924 Suomalaisten karsikoista. *Kalevalaseuran vuosikirja* 4: 7-82.
- Hornborg, K. H.
1886 Karsikoista. *Virittäjä* II: 93-97.
- Kemppinen, I.
1967 *Haudantakainen elämä: karjalaisen muinaisuskon ja vertailevan uskontotieteen valossa*. Karjalan tutkimusseura.
- Krohn, K.
1898 A kind of worship of the dead in Finland. *The International Folk-Lore Congress of the World's Columbian Exposition* 1: 64-69.
- Krohn, J.
1894 *Suomen suvun pakanallinen jumalanpalvelus: neljä lukua Suomen suvun pakanallista jumaluusoppia*. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Pentikäinen, J.
1990 *Suomalaisen lähtö: kirjoituksia pohjoisesta kuolemankulttuurista*. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Sarmela, M.
2009 *FINNISH FOLKLORE ATLAS Ethnic Culture of Finland 2*. (trans) A. Silver.
<https://www.sarmela.net/folklore-atlas/>
- Vahtola, J.
1980 *Torniojoki- ja Kemijokilaakson asutuksen synty: nimistötieteellinen ja historiallinen tutkimus*. Pohjois-Suomen historiallinen yhdistys.
- Vilkuna, J.
1992 *Suomalaiset vainajien karsikot ja ristipuut*. Suomen muinaismuistoyhdistys.
1993 The karsikko and cross tree tradition of Finland: the origins, change and end of the custom. *Ethnologia Europaea* 23(2): 135-152.
- Waronen, M.
1898 *Vainajanpalvelus muinaisilla suomalaisilla*. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.